

---

# 再会

天窪 雪路

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
再会

【Nコード】  
N5435Q

【作者名】  
天窪 雪路

【あらすじ】  
その夢で僕は再び色を持たない存在たちと出会った。

その夢で僕は再び色を持たない存在たちと出会った。もちろん、僕は彼女らとの再会を求めてはいなかったが、彼女らはそれを期待していたようだった。ちょうど十分に人が腰掛けることのできる大きな岩に二人は腰掛けながら、僕は僕の視点で彼女らを見つめていた。視線の高さからすると、僕は地べたにでも座っているのだろうか。自分の姿を自分で見つめることはできなかったので想像でしかないけれど、きつとそうだった。色を持たない存在はこちらが頼まずとも、身勝手に語り始めた。今夜は初めて彼女らの声が聞こえた。

「私たちはもうずっと長いこと生きている。私たちには永遠の命が与えられているのよ」

女の方が言った。僕は特に相槌も打たぬまま、聞こえてくる声をぼんやりと聞いていた。

「あれはどのくらい前だったかしら。つい昨日のことのような気もするし、ずっと遠い昔のことだったと言われればそんな風にも思えるし」

ひどく乾燥した真っ白で巨大な岩石に腰掛けながら、彼女たちからはどこことなく哀しそうな表情を感じ取ることができた。

「とにかく。あれは酷い有様だったわ。私たちがまだ幼かった頃に、何だか変よね、永遠の命なのにちゃんと成長するのよね、まあとにかく、私たちが少年と少女であった頃。ある一人の男が一緒に暮らしていたの」

相変わらず、僕はリアクションらしいリアクションを取らないまま、何となくその話を聞き続けていた。

「その男の人は、そうね、あなたたち人間で言うと、多分四十かそこらくらいの年齢だと思うわ。口数が少なく、私たちがあの人に遊んで欲しいと思っていても、あの人が積極的に遊んでくれることもなかったわね。人付き合いそのものがあまり上手じゃないのよね、きつと。けれど、彼はそうね、言わないことで伝える能力に長けていたわ。ほら、思いや考えていることをすべて伝えてしまうと、かえって伝わらなくなってしまうことってあるじゃない？彼はあるところまでは言葉にしてそこからは聞き手の想像力に任せるっていう、そういうやり方がきつと本能的にうまいのよ。で、彼はそんな寡黙な人だったのだけれど、まだ小さかった私たちにとって、あの人はとても頼りになる存在であったと思うわ。何ていうか、そう、知識と知恵の集まりというのがあの人を上手く表現するのかしら。あなたもそう思うでしょう？」

隣で片膝を立てて僕と同じように彼女の話聞いていた男らしき白い存在が、言葉はなく、だが、頷いた。

「その頼りになる男の人は、キミたちの父親ではないのかい？」

その口数の少ない男の特徴を聞くと、僕には「父親」というイメージが浮かんだ。男性だと思わせる白い存在が僕と同様にあまりにも淡泊な相槌を打つものだから、さすがに彼女が気の毒な気がして、僕は初めて関心を演技した。

「違うわよ」

彼女は即座に否定した。

「あの人は私の父親なんかじゃないわ。私たちには父親だとか母親だとか、そういうのはいないの。私たちはあなたたちがほんの小さな細胞になるよりもずっと以前に生まれたの。あの人は土から生まれたと、そう言うていたわ。それからずいぶん時間が経ったよ、隣の彼は空から創られたのよ。青と赤と白、それにちよつとだけ黒も混ぜて。私はそれから間もなく、海から生まれたわ。そう、私たちには父親なんていないのよ。強いて言うなら父親は神様ね。母親も兼任しているけれど」

彼女は真つ白な顔から真つ白な歯を少し覗かせて笑った。

「それでね。あの人は私たちの父親ではなかったけれど、あなたの想像するように、父親の役割を担った存在ではあったのかもしれないわ。私が空はなぜ青いのかと疑問すれば、それは分かりやすく答えてくれたし、永遠に繰り返す海の波を疑えば、それも明らかにしてくれた。何でも知っていたのよね、きつと。今でも覚えているけれど、月の夜にあの人に聞いてみたの。『月はなぜ光るの？あんなに綺麗に輝くなんて、正直言って嫉妬してしまうわ』と。すると、とても印象的な、そして今の私にとってもとても大切な答えをくれたわ」

彼女は何かに満ち足りているようになって、話を続けた。

「『いいかい？月は自ら光るのではないのだよ。月は太陽の光に照らされて輝いて見えるのだ。昼の空を見てごらん。あそこに薄つすらと月が見えるだろう。あの月も昼間のうちは人の関心を集めはしないが、夜になれば人を魅了するのだ。月は夜の間にだけ、太陽の代わりに輝くことを許されていると言えるかも知れないね。月は自

ら光るのではない。太陽と闇夜の存在があつて、初めてあの美しさを手に入れたんだよ』そう彼は言ったわ。『大切なことは我々が闇夜になって初めて月の美しさに気がつくという事実にあるのだ。我々はそれから、ずいぶん多くのことを学ぶことができる。そうは思わないか?』とても綺麗な答えだったわ。月の輝きにも負けなくらい綺麗な」

彼女は再び、表情を失って続けた。

「それから時間が経過したわ。さつきも言ったように、どのくらいの時間が経ったのかは分からないけれど。あの人はやがて異常なほどに知識と知恵を求めるようになっていたの。あなたたち人間が住むその世界とは違って、私たちの住む世界はとても純粋なものだから、そうね、平たく言えば構造がシンプルなのよ。入り組んだ道もないし、複雑怪奇な雑居ビルもない。で、あの人はある時に言ったの。『もう、この世界には知らないことはないのかもしれない。私には明日何が起ころるのかも、大方予想することができるよ。ほら、あの木から実が腐り落ちただろう。そうなると分かっていたよ』あの人は全知全能の神に憧れていたのかも知れない。それからというもの、心ここにあらず、という感じね。生気が失われていく感じだわ」

僕は無知だが、どこかその男に共感できた。

「空一面が混沌に満ちた日に、パンドラの壺の話になったの。あの人の世界の中には、もう知らないことは存在していなかったのでしょう。あの人はあの時の世界の中で唯一隠された部分のあった壺の中身を求めたの。ほら、壺って覗き込まないと中身が見えないでしょう?そのくらいしか、あの人に知らないことはなかったのよ、きっと。けれど、神様は言ったの。『知らないということが救いであ

ることもあるのだ。その壺には私たち神々の残した希望が入っている。希望が壺の中で守られているのだ。壺を覗いてはいけない。もしも誤って希望が外界に触れてもしたら、この世界の平和は破られてしまうだろう」

けれどあの人はそれほど葛藤することもなく、神様の忠告を無視して壺の中を覗いてしまった。『希望というものがどんなに魅力的なものなのか、私はどうしてもそれを知りたい。この世界で知らないことはないが、唯一この壺のことだけは知らない。壺の中身が神々のみぞ知る希望というのなら、それを知れば私も神になれるのではないか』そう言っ、彼はきつとこれまでに見たことも聞いたこともない希望という存在への期待を膨らませて、覗き込んでしまった。けれども、壺の中には何もなかったわ。

そう、知らないということが救いであったの。まだ知らないものがあるという期待が、すなわち希望という名の救いだったの。まさに神様の言われた通り。

何もないということを知ってしまった彼は絶望し、狂ってしまった。期待を裏切られ、あの人は心を壊してしまったの。そして自らの命を絶つたのよ。

あの人が死んで。その時の彼の鎮魂歌の何と悲しいこと」

ちらりと傍らの彼の方を見て言った。

「この世界を悲しみで覆いつくすような歌声。けれど、同時に美しくもあつたわ。悲痛な叫び、と言うのかしら。それは痛みを感じるけれど、とても美しいものだったわ。彼の歌声は、それはもう美しかったのよ。しかし、彼はそっくりそれを失ってしまった。歌うことばかりか、その源である声すらも」

原罪。

どうしてかそんな二文字を思い浮かべながら、僕は初めて自らその

先の話求めた。そして、僕はいくらか関心を持って、彼女らの話に耳を向けた。

その時ふと、昔、蜘蛛を袋詰めにして玩んだことを思い出した。その足音や鳴き声が聞こえるはずもなかったのだけれど、どうしてか蜘蛛の存在に気付いた。どこからともなく、蜘蛛が一匹迷い込んで来ていたのだ。彼が何を求め、何を欲したのか。悪意のない好奇心の塊は知る由もなかった。好奇心の塊は突如として与えられたオモチャに興味を示した。オモチャとして捕らえられた蜘蛛。この後に待ち受ける運命はいかなるものか。好奇心の塊にとって、迷い込んだ蜘蛛の意思などどうでもよかった。

意思とは裏腹に、蜘蛛は玩ばれた。限りなく透明な檻の中に捕えられて。疑えば夢の如く消え失せよう檻の中。何度も何度も、いつ止むとも知れぬ拷問。繰り返し繰り返し、上下とも左右とも知れぬ床にたたきつけられ、やがて蜘蛛は息絶えた。あとひと振りに耐えられれば、寸前のところで生かされたかもしれない。けれど、好奇心の塊は詰まるところ、蜘蛛の最期を見届けたかったのだ。

そしてまた一振り。蜘蛛は動かない。どれだけ揺さぶろうとも、足をまるめたまま動かない。もう二度と。オモチャを失った塊は僅かばかりの罪悪感と、興味の対象が失われた底知れぬ喪失感に苛まれた。

何にでも臨界点はある。あとひと振りがなければ、蜘蛛は生き延びたかもしれない。けれど、好奇心の塊は最期を見届けたかったのだ。少年の残酷さを思うと、人は尚も原罪を犯し続けているという気がしてならない。

人は命を与えられると泣くものだ。なぜ、笑顔じゃないのだろうか。そして、なぜ何も見ないのだろうか。まるで散り逝く定めを悟るように閉じた瞳。そして、ただひたすらに泣き叫ぶ。生まれ堕ちた赤子はただひたすらに。

すべての愛をその一身に集めながら、人はなぜ汚れていくのだろうか

か。純白の翼を身に纏い、美しい世の中に羽ばたくはずだった。なぜ、それを闇に染めるのだろうか。

腐り堕ちた翼を見下ろして、キミはやがて知るだろう。地上を歩くことは空の上から想像していたよりもずっと厳しいものだ。わずかながらの幸福と、溢れるほどの不幸を知り、僕らはまるで何もかもに縛り付けられたマリオネットのように、この胸に抱き締めた心の叫びを飲み込んでいく。誰かに救いを求めて。誰かに愛を求めて。喉を切り裂けば、とめどなく溢れるだろう。けれど、僕は思う。そんな不完全で欠落した醜い現実にこそ、完全に満ちた理想が宿るのだと。広いこの世界の中で、僕はわずか狭量な僕の世界の住人だからこそ、その外の世界に憧れ、理想を夢見て生きていくことができる。

なんて美しい夢なのだろう。僕はもう少し夢の続きを見ることにし、粗末な布団の中にもぐりこんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5435q/>

---

再会

2011年2月7日07時52分発行